

食料・農業・農村審議会企画部会（114回）への意見

食品産業センター会長

堀切 功章

本来なら出席の上議論させていただきたかったのですが、残念ながら出席がかなわないため、特に食品産業の海外展開についてコメントを提出させていただきます。

国内市場が縮小方向にある中、食品産業にかかわる人達には未来への夢とか希望が必要です。

需要が伸びている海外に目を向けるのは必然ですが、従来の農水産物等の輸出だけでなく、食品産業のグローバル展開も、食文化への理解促進、インバウンドとの相乗効果も期待でき、海外需要の取り込みには非常に有効と考えております。

このような方向性を国が示し後押しすることは意義深いものと考えております。

半世紀前より海外展開に取り組んできた私どもの経験から言うと、食品の海外展開を進めるにあたって課題もいくつかあるかと思います。

まず、海外展開の際、マーケットインの考え方でお客様が求めているものを作るという考えは、国内でも海外でも変わりません。

そのうえで、食べ物に関しては、基本的に保守的であり、新しいものをすぐに口に入れてくれません。

国によって規制が異なり、表示制度が異なるとパッケージを変えねばならなくなります。

加えて、宗教の規制（ハラール、コーシェルなど）、食のスタイル（ベジタリアン、ヴィーガン）、環境問題も絡んできます。

このため、将来に展望をもたらす目標を設定することは重要なことと思います。

一方で、食文化の浸透には時間を要するなど、すぐに結果が出るものではないこともご理解いただければと思います。

いずれにせよ、輸出や海外展開にはリスクもあることから、それを行政がサポートしていくという姿勢が必要かと考えます。

また、日本の企業としてのベースは日本の市場であり、その上に海外の市場があるということは基本とすべきと考えております。